

話しことば・書きことばの程度をどのようにして測定するか？

芹澤 円

1. はじめに

17 世紀末から 18 世紀にかけての啓蒙主義時代において、雑誌というものは大衆に向けて作られたものではなく、「一般にこの種の雑誌は市民層にのみ普及した」(エンゲルジング 1985: 99)。読者対象は教養市民に限られ、そのため読者数は少なかった (Polenz 1999: 35 を参照)。1720 年から 1760 年には、とりわけ道德週刊誌 (Moralische Zeitschriften) がドイツの教養市民層の啓蒙を強化する役割を演じた。当時の道德週刊誌では社交的な歓談文体で綴られた多様なテーマが扱われており、また、物語形式、寓話形式、手紙形式、談話形式などで書かれていた (Polenz 1999: 35 を参照)。また、若い女性や婦人に対しては教育学に関する助言等も示されていた。このような道德週刊誌はその多くが、架空に設定された執筆者 *ich* という観点から直接に読者とのつながりを築こうとするものであった。このような内容と形式によって、道德週刊誌は当時の市民層の知識や、倫理観、人生経験に影響を与えようとした (同上、同ページ参照)。

このような雑誌が発行されるなか、流行や贅沢を扱うモード雑誌と称される雑誌も登場し始める。このようなモード雑誌は、啓蒙を押し進めるための雑誌とは異なり、人々の娯楽のために発行された。当時のモード雑誌は、印刷物の機能変化を象徴する印刷物であるといえる。モード雑誌が初めて登場したのは、1758 年であり、『新しいモードと振る舞いに関する新聞』 („Der neuen Moden- und Galanteriezeitung[sic!]“) という雑誌である (Krempel 1935: 26 を参照)。しかし、この雑誌は、約 1 年で廃刊となり、短命に終わった。それから約 30 年が経過し、2 番目のモード雑誌として 1786 年に『豪奢とモードのジャーナル』 („Journal des Luxus

und der Moden“¹⁾ が登場する¹⁾。この雑誌は 42 年間にわたり発行され、「最盛期には一つの版が 2250 冊に達し [...] 少なくとも 2 万 5 千人の読者」(Kuhles 2000: 489) がいたと見積もられ、現在のベストセラーに値すると言われている (Kuhles 2000: 489 及び, Kröll 1979: 162 を参照)。「週刊誌や月刊誌が 2、3 年続けて発行されると、18 世紀においてはかなりの成功を意味していた」(赤木 2008: 4) とされるなかで、42 年間も発行され続けた『豪奢とモードのジャーナル』は確かに、ベストセラーに値するといえるだろう。

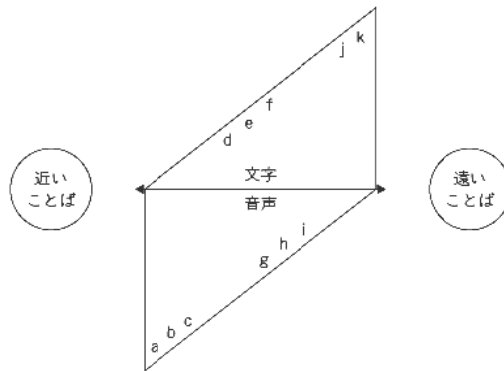
この『豪奢とモードのジャーナル』が多くの読者たちに娯楽的な内容を紹介したことから考えて、そこに綴られたことばは、読者にとっての理解のしやすさや親しみやすさに配慮した話しことば性の高さが見いだせるのではないだろうか。そこで、本論文では、『豪奢とモードのジャーナル』における言語を分析の対象とし、話しことば・書きことばの程度を測定してみたい²⁾。その際に適用するのは、Ágel/Hennig (2006) によって提唱された「近いことば性・遠いことば性 (Nähesprachlichkeit/Distanzsprachlichkeit)」の測定法である。「近いことば性」とは、2.1.で述べるように、話しことば性に相当し、「遠いことば性」とは書きことば性に相当する。本論文ではさらに、『豪奢とモードのジャーナル』のテキストにどれほどの「近いことば性」が存在するのかを考察しながら、Ágel/Hennig (2006) の測定モデルに関して、その効力、妥当性に関して方法論的考察も行うこととする³⁾。

- 1) このモード雑誌はタイトルの変更が何度か行われているが、『豪奢とモードのジャーナル』 („Journal des Luxus und der Moden“) が最も長く使用されていたため、本論文ではこのタイトルを用いることとする。
- 2) 芹澤 (2013) では、この『豪奢とモードのジャーナル』の 1786 年と 1814 年の服装記事を文体的に分析した。その結果、用いたサンプルテキストに限ってのことではあるが、1786 年のテキストは事柄に方向づけられた書き方の傾向性、一方 1814 年のテキストは読者に方向づけられた書き方の傾向性が確認できた。
- 3) 芹澤 (2014) では、この Ágel/Hennig (2006) の測定モデルに依拠して話しことば性という観点から 16 世紀中頃から 17 世紀初頭の報道を目的とする印刷物、すなわち 1549 年の「最新報告 (最新の出来事について書かれた一枚刷りの印刷ビラの総称であり、多くの場合挿絵が付随している。このような印刷物は 16 世紀半ばから 17 世紀半ばにかけて多く刷られ、ドイツにおける新聞の先駆けとして重要な役割を演じた。)」1610 年の「最新報告」そして 1609 年の週刊新聞を比較した。その結果 1549 年の「最新報告」テキストの「近いことば性」が最も高く (8.49%)、続いて 1609 年の週刊新聞 (0.97%)、1610 年の「最新報告」 (-5.39%) と続いた。従って、報告・報道的内容のテキストは時代の移行とともに全体として遠いことば性が高まっていたと結論づけることが可能である。

2. Ágel/Hennig (2006) の測定法

2.1. 近いことば性・遠いことば性という概念

「近いことば」という概念は、Koch/Oesterreicher (1985) によって提案された「近いことば (Sprache der Nähe)」と「遠いことば (Sprache der Distanz)」のモデルにおいて初めて登場した。このモデルは、さまざまなテキストの話しことば性・書きことば性の度合いを相対的に位置づけるためのものである。このモデル (図 1 を参照) では、「話されることばと書かれることばは、もはや単純な二分法で分類されていない」(高田・椎名・小野寺 2011: 13)。まず、上下において音声メディアであるのか、文字メディアであるのかを区別している。さらに、横軸に走る座標軸によって、「近いことば」と「遠いことば」の程度を表している。この両極に示された「近い」、「遠い」という概念は、話し手と聞き手の間の親疎関係を表している。



a: 打ち解けた談話, b: 友人との電話, c: インタビュー,
d: 印刷されたインタビュー, e: 日記, f: 個人的手紙
g: 面接時の談話, h: 説法, i: 講演, j: 新聞記事, k: 行政上の規定文

図 1: Koch/Oesterreicher (1985) による「近い／遠い」ことばのモデル⁴⁾

Koch/Oesterreicher (1985) は、テキストの近さ・遠さを決めるパラメーターとして、会話かモノログか、(話し手と聞き手が) 親密な関係か、対面したコミュニケーションか、情緒的であるか、私的か公的かなどを挙げている (Koch/Oesterreicher 1985: 23 を参照)。

4) 高田・椎名・小野寺 (2011: 13) にある図表より。

例えば、モデル内で示されている f の「個人的手紙」と i の「講演」に注目してみよう。「個人的手紙」は図の上側に位置しており、文字メディアであることがわかる。一方で「講演」は下側に位置づけられており、音声メディアであることがわかる。では、この二つは横軸ではどの辺りに位置づけられているだろうか。

「個人的手紙」は文字で書かれたメディアであるにもかかわらず、図表上では話されたことばである「講演」よりも左側に位置づけられている。これは、文字で書かれたことばが話されたことばよりも話しことば性が高いことがあり得ることを示しているのである。親疎関係の距離の近さという点から見れば、「個人的手紙」は「講演」よりも送り手（話し手）と受け手（聞き手）とが近い。そのために、相対的に「個人的手紙」の方が「近いことば性」つまり話しことば性が高いと言えるわけである。

2.2. Ágel/Hennig (2006) による考案

その後、Ágel/Hennig (2006) は、Koch/Oesterreicher (1985) のモデルに依拠して、ドイツ語の話しことば性を具体的に測定する方法を考案した。Ágel/Hennig (2006) は、当該テキストに確認できる近いことば性の高い要素を一つずつ数え上げていくことで、各テキストの近いことば性を算出しようとした。このモデルでは、Koch/Oesterreicher (1985) と同様に横軸に座標を設定し、その両極には特定のテキストが置かれている。

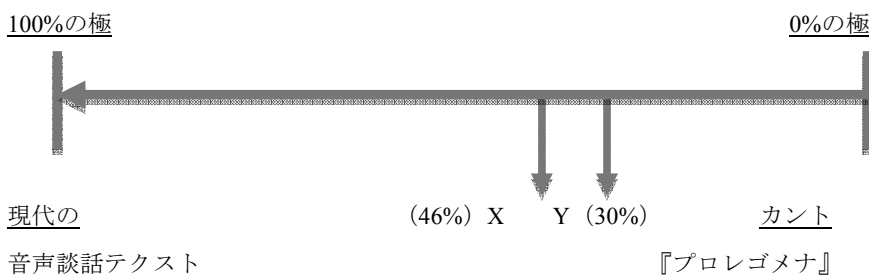


図 2 : Ágel and Hennig (2006) によって設定された話しことば性の座標軸

左端には、規準テキストとして現代の音声談話（ラジオの DJ と若い男の子の会話）を文字化したテキストが置かれている（Ágel/Hennig 2006: 36 を参照）。ここでは、このテキストから算出された話しことば性の値が、便宜的に話しことば性が 100% であると設定されている。同様に、右端にはカントの『プロレゴメナ』（1783）が、規準テキストとして置かれ、この『プロレゴメナ』の話しことばから算出された値が、便宜的に話しことば性が 0%、つまり書きことば性が 100% であると設定されている。このように、あらかじめ両極に規準を設けなければ、話しことば性と書きことば性の度合いを比較できないからである。測定したテキストの値を最終的にこの座標軸上に位置づけることで、テキスト同士の話しことば性の高さを相対的に比較することが、このモデルの眼目である。例えば上記の座標軸上にテキスト X と Y があると仮定する。テキスト X の話しことば性は 46% あり、テキスト Y は 30% あるとする。この数値を相対的に比較するために座標軸上に位置づけると、テキスト Y よりもより左に、つまり話しことば性 100% の極に近い距離に位置づけられているテキスト X は、話しことば性が高いということになる。このことに関して Ágel and Hennig は以下のように述べている：

ここで明言しておきたいが、われわれの研究はパーセンテージの算出によって数学的な精密性を示唆する意図はない。重要なのは、任意の談話もしくは（コーパス）テキストを近いことばの極と遠いことばの極の間に位置づける際に、思弁的ではない方法が適用できること、そして、このようにすることで [...] コーパステキスト同士の比較が可能となることである。（Ágel and Hennig 2006: 35）

Koch/Oesterreicher（1985）のモデルでは、既に例として示した f「個人的手紙」と i「講演」の比較の際に、たしかに f の方が話しことば性がおおよそ高いことを示すことができる。しかし実際に f と i とがどの程度離れているのかという点について、数値化して示すことはできなかった。そこで Ágel and Hennig は、上に述べた考え方によって、パーセントの数値による表現を可能にしたのである。

Ágel/Hennig は、話しことば性の度合いを数値化するには、ミクロレベル（語・句レベル）とマクロレベル（文レベル）での数値算出が必要だと考えている。そして両レベルの数値の平均値をテキストの最終的な「近いことば性」の値として

いる。例えば、このモデルにおける近いことばと遠いことばを区別する規準の一つに、「統合的」(integrativ)であるのか、それとも「非統合的」(aggregativ)であるのかという点がある。ミクロレベルの観点から言えば、統合的な *woran* という疑問詞が使用できるところで「非統合的な疑問詞」*an was* を使用している場合は、この *an was* は近いことば性のある要素と判定される (Ágel/Hennig 2006: 388 を参照)。また、マクロレベルの観点から言えば、例えば「自由テーマ」(*freies Thema*)⁵⁾や、「付け足し」(*Nachtrag*)⁶⁾、「枠外配置」(*Ausklammerung*)といったものは、文の周縁に非統合的に位置することから、近いことば性があるとされる⁷⁾。この他にも「心態表示」(*Abtönung*)や「情緒の表出」(*Emotionsausdruck*)なども、近いことば性が高い要素と見なされる。

3. Ágel/Hennig (2006) の測定法に依拠した分析

本論文で分析対象とするのは、『豪奢とモードのジャーナル』の発刊年となる 1786 年のテキストである。この時期に発行されたテキスト比較検討することで、「近いことば性」の値の相違を考察していきたい。具体的には、女性の帽子に関する記述がなされているもの、各々挿絵が付随しているもの⁸⁾、そしてテキストの総単語数がおおよそ同程度のものであるという共通の条件のもと、下記のテキストを分析対象とした⁹⁾。

- 5) 自由テーマの例として挙げられているのは、*Hermann und Karl für die macht es eine groselast.* における *Hermann und Karl* である。つまりこれは、「文の左端にある、文外部の文周縁構造 (*Satzrandstruktur*)」であり、統語的に後続文を投影する構造の構成要素ではないが、語用論的な投影を引き起こし、「聞き手による」受容を制御する」(Ágel/Hennig 2006: 391) ものと定義されている。
- 6) 付け足しの例としては、*in der Underpaltz sunsten wonhafft wahr zur Neystatt bey der großen Linden* における *zur Neystatt bey der großen Linden* である。つまりこれは、「右側の文周縁部にある非統合的な構造であり、先行文の投影構造の構成要素ではなくて、むしろ、既に実現された投影構造の要素が、付け足しによって精密化される」と定義されている (Ágel/Hennig 2006: 39 を参照)。
- 7) Ágel/Hennig は、文の周縁にある構造 (*Satzrandstruktur*) を原則的に非統合的としている (Ágel/Hennig 2006: 53) を参照。
- 8) 当該のモード雑誌では、創刊年には各月に必ず帽子の描かれた挿絵 (とりわけ 2 月号以降、全体像の挿絵に加え、胸から上だけを取り上げた挿絵が付随されるようになった) に関する記述がなされていた。このことから、共通性をはかるために、挿絵が付随している女性の帽子のテキストを対象とした。
- 9) 本論文の巻末に、この 3 つのテキストの全文と日本語訳を挙げた。

表 1 分析対象の基本情報

	テキスト A	テキスト B	テキスト C
年代、月号	1786 年 1 月号	1786 年 2 月号	1786 年 6 月号
総単語数	229	248	286

3.1. ミクロレベルでの分析

では、テキスト A (1786 年 1 月号)、テキスト B (1786 年 2 月号) そしてテキスト C (1786 年 6 月号) を、Ágel/Hennig (2006) の測定法によって分析を始めよう。まずは、語・句のミクロレベルである。Ágel/Hennig が定めた基準に従い、「近いことば性」の要素を数え上げた結果、テキスト A では「近いことば性」の要素として 18、テキスト B では 15 そしてテキスト C では 26 の要素が観察された。テキスト A では「時間の直示性」(Zeitdeixis) や枠外配置 (Ausklammerung)、動詞が「時制の直示性」(Temporaldeixis)¹⁰⁾として近いことば性の要素に数え上げられた。B では、動詞に関する要素が「近いことば性」の要素として観察された。テキスト C では動詞に関する要素の他に、wir などの人称代名詞(「人称の直示性 (Personaldeixis)」)が「近いことば性」の要素として観察された。以下にテキスト C の例を示す。

(本文) Wir liefern eine dergleichen Baigneuse auf Taf. XVII. fig. 2.

(分析) → 「人称の直示性」 → 「時制の直示性」

(訳) われわれは同様の Baigneuse というベールを挿絵XVII.の人物 2 にて展開し
ています。

ミクロレベルの結果を表として以下に示す。

10) Ágel/Hennig では動詞が「時制の直示性」として「近いことば」の要素としてカウントされる。しかし、「副文の場合は、時間関係は上位の文に依存するため、直示的ではない」とされ、副文内の動詞は「近いことば」の要素としては数え上げられない。(Ágel/Hennig 2006: 58 を参照)。

表 2 ミクロレベルでの近いことば性の値

	テキスト A	テキスト B	テキスト C
年代、月号	1786 年 1 月号	1786 年 2 月号	1786 年 6 月号
総単語数	230	248	286
近いことば性の要素	18	18	24
ミクロレベルの近いことば性の値	12.48%	9.59%	14.29%

ミクロレベルの「近いことば性」では、テキスト C、A、B の順に高い「近いことば性」の値が得られた。

3.2. マクロレベルでの分析

マクロレベルは、文レベルにおける「近いことば性」の値を測定する。このレベルでは、基礎文 (Elementar-Satz) が測定の基準となる¹¹⁾。基礎文のうち、主文であるものは「基礎文 1 (Elementar-Satz 1)」となり、副文であるものは「基礎文 x (Elementar-Satz x)」と分類される。例えば 6 月号のテキスト内にある以下の文 „Eine von der schönsten und simpelsten Form ist eine Toque à la Turque, die wir auf Taf. XVIII. hier liefern.“では„Eine von der schönsten und simpelsten Form ist eine *Toque à la Turque*,“は基礎文 1 として、„die wir auf Taf. XVIII. hier liefern.“は基礎文 x として数え上げられる。また、形式的には文ではないが文と等しい要素、すなわち「文相当表現 (Nicht-Satz)」もこのマクロレベルにおいて扱われる。マクロレベルでは「近いことば性」の要素をもつ文相当表現を「近いことば的な文相当表現 (NNS: Nähe-Nicht Satz)」¹²⁾というカテゴリーとしてカウントする。このカテゴリーには既に述べた「追加」や「枠外配置」、「心態表示」や「情緒の表出」が含まれるが、今回の分析対象にはこれらの項目は観察されなかった。しかしながら、以下に示すように動詞を伴わない表現がいくつかみられた。例えばテキスト A の „Hüthe trägt man jetzt außerordentlich groß, und zu jedem Anzuge, nur nicht zur *grande parure*; häufig Stroh-Hüthe mit hohem Kopfe, mit farbigem Bande eingefasst; um den Kopf ein

11) Ágel/Hennig によればこの Elementar-Satz1 は「非従属文もしくは支配する文 (すなわち全ての単一文もしくは主文)」であり、すなわち「第一レベル (erster Grad)」の基礎文のことであり、それ以外は副文とされている (Ágel/Hennig 2006: 64 を参照)。

12) これ以降、話しことば的な文相当表現を NNS と表す。

oder zwey dergleichen breite Bänder, oder eine dicke Binde von Farben-Flor,“ における、
 „häuffig Stroh-Hütthe mit hohem Kopfe, mit farbigem Bande eingefasst“ や „um den
 Kopf ein oder zwey dergleichen breite Bänder, oder eine dicke Binde von Farben-Flor “
 である。このような表現は次に示す DNS (「遠いことば的な文相当表現
 (Distanz-Nicht-Satz)」) に当てはまらないため、ここでは NNS として数え上げた¹³⁾。
 DNS は「遠いことば的な文相当表現 (Distanz-Nicht-Satz)」を意味し、見出し語や
 手紙の呼称形式などがこのカテゴリーに含まれる (これは少ないほど、近いこと
 ば性が高いこととなる)。例えば、1786 年のテキストには 2. *Hütthe* 「2. 帽子」(1786:
 17) といった見出し語が確認された。さらに I-UBS とは、「別の基礎文によって
 統合的に中断された文 (integrativ unterbrochener Satz)」(Ágel/Hennig 2006: 64) と
 定義されている。今回の分析対象のテキストには、I-UBS の要素は観察されなか
 った。

このような分類のもと、それぞれの要素がいくつあるのかを数え上げていった。
 以下にそれぞれの総数を表 3 に示した。テキスト A、テキスト B、テキスト C の
 マクロレベルでの「近いことば性」の値を算出すると、その結果、表 4 のような
 値が得られた。

表 3 マクロレベルにおけるそれぞれの値

	総単語数	NNS	全ての 基礎文	基礎文 1 (主文)	基礎文 x (副文)	DNS	I-UBS
テキスト A	229	5	16	8	8	1	0
テキスト B	248	0	24	18	6	-	-
テキスト C	286	0	30	21	9	-	0

表 4 マクロレベルでのそれぞれの「近いことば性」

分析対象	a) NNS/全基礎文	b) 基礎文 1/基 礎文 x	c) 全基礎文/中 断されている 基礎文	d) 総単語数/NNS 及び全基礎文
テキスト A	40.95%	7.53%	-	-33.99%
テキスト B	-	62.62%	-	-32.38%
テキスト C	-	47.59%	-	-18.85%

13) 名詞文 (Nominalsatz) としてとらえ、コブラの省略とも考えることも可能だが、本分
 析では NNS の要素とする。

a) ではテキスト内で全基礎文に対する NNS (「近いことば的な文相当表現」) の割合を示している。b) の計算式では、主文と副文の割合を比較している。主文が多い程、「近いことば性」の高いテキストとなる。c) では、全基礎文に対する入れ子構造の基礎文 (I-UBS) の割合を示している。この入れ子構造の基礎文が少ない程 (これが少ないほど c の値は高くなる)、より「近いことば性」の高いテキストであることを示している。そして d) の計算式では、一つの基礎文がどれくらいの長さで構成されているかを測定する。基礎文が短い程、「近いことば性」が高いとされる。また表内にて、いくつかマイナスの数値が算出されたことがみてとれる。この結果は、Ágel/Hennig (2006) が設定した遠いことばの規準テキスト (カントの『プロレゴメナ』) よりもさらに遠いことばの要素が現れていると解釈される。

Ágel/Hennig (2006) は、a) -d) で得られた 4 つの値の平均値をマクロレベルの「近いことば性」の値としている。そこで、それぞれのマクロレベルの値の平均値を以下の表に示す。

表 5 マクロレベルの 4 つの平均値

	テキスト A	テキスト B	テキスト C
マクロレベルの値	4.83%	15.12%	14.37%

マクロレベルでは、相対的にみてテキスト B と C に高い「近いことば性」が含まれている。結果として、テキスト B、C、A の順にマクロレベルでの「近いことば性」の値が順位付けられる。

3.3. 最終的な「近いことば性」の値

Ágel/Hennig のモデルでは、ミクロレベル、マクロレベルの両レベルで得られた値を平均化したものが最終的なテキストの「近いことば性」であるとしている。したがって、その平均値を以下に示す。

表 6 最終的な「近いことば性」の値

	テキスト A	テキスト B	テキスト C
マイクロレベル値	12.48%	9.59%	14.29%
マクロレベル値	4.83%	15.12%	14.37%
最終的な近いことば性の値	8.66%	12.36%	14.33%

最終的な「近いことば性」の結果から、今回の 3 つの分析対象ではテキスト C、B、A の順に「近いことば性」が高いテキストであるということが言えることになる。

4. 「近いことば性」測定モデルに対する方法論的考察

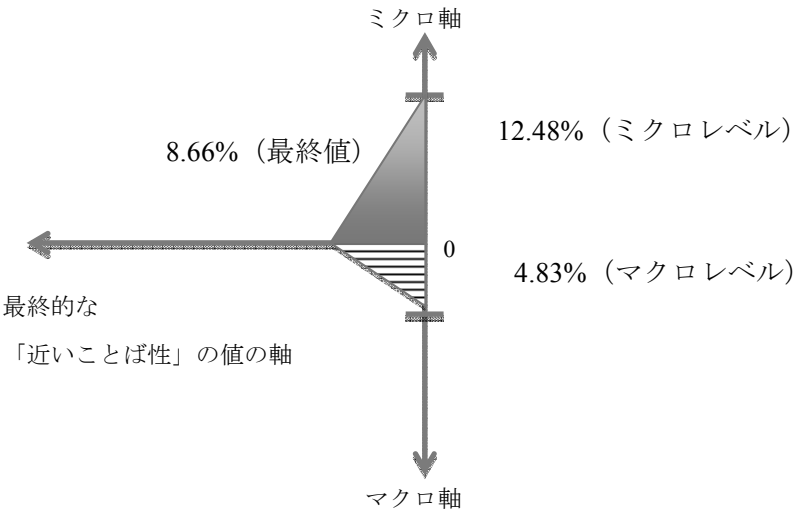
本論におけるにおける 3 つのテキスト分析ではそれぞれの総単語数がおおよそ 250 語であり、比較的少ないものであった。しかしながらこのような条件下での「近いことば性」の測定であっても、この測定法に関していくつかの疑問、及び改善できると思われる点があった。そこでこの章では、それらの点について述べていきたい。

4.1. 「近いことば性」の最終値という問題

Ágel/Hennig (2006) の「近いことば性」のモデルでは、すでに述べたように、マイクロレベルとマクロレベルの平均値を最終的なテキストの「近いことば性」の値としている。確かに、当該のテキスト全体に対して一つの最終的な値を提示することで、テキストの「近いことば性」の値を明確に与えることができる。しかしながらマイクロレベルとマクロレベルを平均化してしまうことで、それぞれのレベルにおける「近いことば性」の割合の特徴を見えないものになってしまうのは、問題があるのではないだろうか。

そこで筆者は、横軸及び縦軸の両方に関して 100%率の座標軸を使い、マイクロレベルとマクロレベルの両方と最終的な「近いことば性」の値を一目で把握できる座標軸を考案してみた。テキスト A を描いた図 1 を参照いただきたい。

図 1 テキスト A の「近いことば性」から形成される三角形



この二重の座標軸では、（右端に近いことば性が 0 の値を置き基準とした）横軸に最終的な「近いことば性」の値を置き、上方向へ伸びる縦軸（「マイクロ軸」）にはマイクロレベルで算出された「近いことば性」の値を、そして下方向へ伸びる縦軸（「マクロ軸」）にはマクロレベルで算出された値を位置づけるというものである。この 3 点をそれぞれ直線で結ぶと、三角形が描かれる。この三角形の形状と面積の占める割合により、どの程度のマイクロレベルの値とマクロレベルの値によって最終的な「近いことば性」が算出されたのかを、図によって可視化することができる。その際三角形はひとつではなく、全部で 3 つある。上側（マイクロ軸）に作られた三角形はマイクロレベルの三角形であり、反対に下側（マクロ軸）に作られた三角形（横線がつけられている）はマクロレベルの三角形である。この図 1 を見ると、マイクロ側に作られた三角形のほうがマクロ側に作られた三角形よりも面積が大きいことが一目でわかる。つまりテキスト A で得られた最終的な「近いことば性」の値（8.66%）のほとんどは、上方のマイクロレベルの「近いことば性」の高さによって得られた値であることが一目で把握される。このテキスト A を上部偏重三角形タイプと呼んでおこう。

次にテキスト B についてみていきたい。テキスト B は、次の図 2 のように表す

ことができる。

図2 テキストBの「近いことば性」から形成される三角形

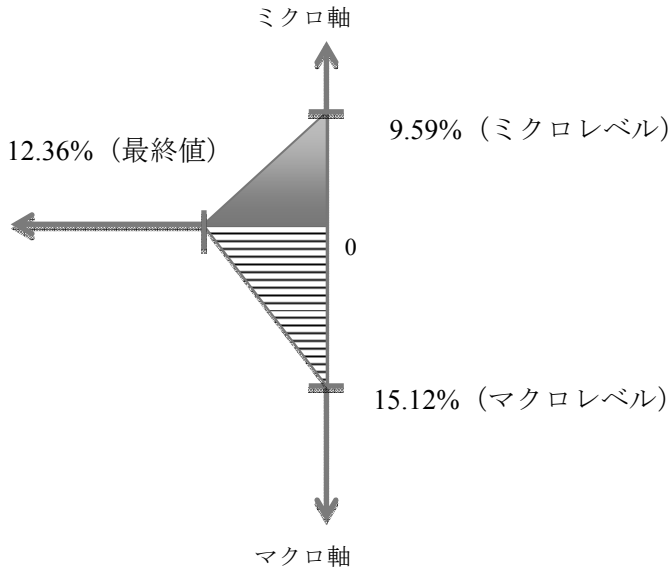
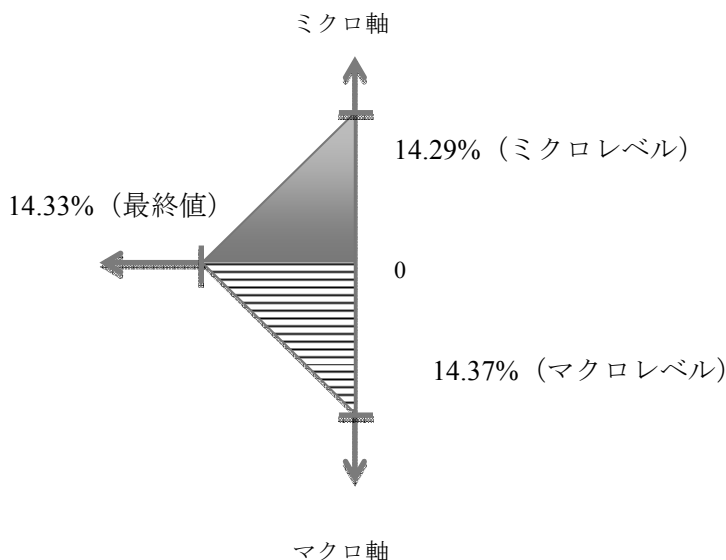


図2では、マイクロ・マクロレベル値そして最終値で形成された三角形は若干ではあるがマクロ側に作られた三角形の面積のほうが大きいことがわかる。

すなわち、テキストBの最終的な「近いことば性」は、マイクロレベルの値よりもマクロレベルの値のほうがが少し大きい数値の平均から得られた値であるといえる。このテキストBを下部偏重三角形タイプと呼んでおく。

最後にテキストCについてみる。テキストCは、次の図3のように表すことができる。

図3 テキストCの「近いことば性」から形成される三角形



テキストCのミクロ・マクロレベルの値、そして最終的な「近いことば性」の値によって作られた軸上の三角形は、ほぼ二等辺三角形の図形となった。図3を見ると、テキストCの最終的な「近いことば性」の値がミクロ・マクロの両レベルがほとんど同等の値によって算出された数値であることが一目瞭然である。テキストCは二等辺三角形タイプと呼ぶことにする。

以上のように、Ágel/Hennig (2006) の測定法による最終的な「近いことば性」の値だけでなく、ミクロ・マクロ両レベルの値も最終値と同等の重要性があるものとして扱い、上に示したような図で表すことで、2つのレベルがどのように関係し合って最終値がえられたのかを一目で表すことができる。

4.2. 基礎文の総単語数から導かれる「近いことば性」の問題性

マクロレベルにおいて「近いことば性」を算出する際には、前述したとおり、最初に4つの値を算出する必要があった。すなわち、a) 全基礎文に対する「近いことば的な文相当表現」(NNS)の割合、b) 主文と副文の割合、c) 全基礎文に対する入れ子構造の基礎文(I-UBS)の割合、そしてd) 一つの基礎文が何語によっ

て構成されているか、という 4 つの項目である。このうち最後の項目に関して、今回テキスト分析をするにあたり、その妥当性について疑念がわいた。

この項目において、例えばテキスト A は-33.99%、テキスト C では-18.85% という、Ágel/Hennig (2006) が近いことばが 0% として設定したテキストよりも近いことば性がさらに少ないという算出結果が得られた。しかし、テキスト A と C をよく注視してみると、一文が長い、つまり基礎文を構成する単語数が多いという単純な理由で、これらのテキストの「近いことば性」がきわめて低いとは言いきれないことがわかる。例えばテキスト A には、以下のような一文がある。

1) Hüthe, trägt man jetzt außerordentlich groß, und zu jedem Anzuge, nur nicht zur *grande parure*; häufig Stroh-Hüthe mit hohem Kopfe, mit farbigem Bande eingefasst; um den Kopf ein oder zwey dergleichen breite Bänder, oder eine dicke Binde von Farben-Flor, die mit einem Perlen-Knopfen gefaßt, und hinten in eine große Schleife gebunden wird, davon die Enden zwey bis drey Finger breit über den Rand des Huthes herabhängen. (1786: Januar. 17)

帽子は目下、非常に大きなものが被られており、いずれの服装に対しても被られますが、正装 (*grande parure*) に対してだけは被られません；しばしば頭部が高く、色のついたリボンで囲まれた麦わら帽子が被られています；頭部の周りは、一本か二本の色のついた幅広なりボン、もしくは、色づけされたガーゼの、パールのボタンでとめられた太い帯によって結ばれており、そして後ろでは蝶結びの形に結ばれています。そこからリボンの端が、2-3 本の指幅で、帽子の淵を越えて垂れ下がっています。

この一文は 66 語から構成されている。また、テキスト C においても 45 単語で構成された以下のような一文が書かれている。

2) Sie ist von weißen gestreiften Flor-Linon, hat vorn rund herum kleine Perlen-Gehänge, und an der linken Seite ein Paar Doppel-Festons von größern Perlen; die Flügel hängen kaum bis zu den Schultern herab, und drauf sind ein Paar grüne Perlen-Zweige und ein Zweig kleine Blume gesteckt.

Toque a la Turque (文中の Sie) は、白い縞模様のガーゼリボンでできており、前方では周囲に小さな真珠の下げ飾りがあり、左側には大きな真珠でできた一対の二重花綵があります；羽はかろうじて肩まで達する程度にたれ下がっており、その上には一組の真珠枝とさらに枝が小さな花へ差し込まれています。(1786: Februar. 62)

これらの文は確かに長い文ではあるが、いわゆる書きことば性の高い長さとは言えないと考えられる。オングは、「まったく書くことを知らない」(オング 1991: 5) ような「一次的な声の文化」においては、「思考と表現が次のような性格を持つ傾向がある。[...]累加的 additive であり、従属的ではない」(同上、83) と述べている。そしてオングは声の文化に特有な累加的な様式の例として、『創世記』第1章から第5章の天地創造の語られ方を挙げている。「はじめに神は天と地を創造された。[そして]地は形無く、むなしく、[そして]やみが淵のおもてにあり、[そして]神の霊が水のおもてをおおっていた (オング 1991: 5)。オングは並列的に情報を加えていくような文を口語的であると示唆している。上に示したテキスト A と C の文では、前置詞句や分詞構文、動詞を伴わない構文などで、文の後域に次々と新たな情報の累加的な「付け足し (Nachtrag)」がなされている。算出から得られた「近いことば性」の数値を見ただけでは、上に示したテキスト A と C のような文は、近いことば性のきわめて低い文だと解釈されてしまう。しかし実際には、これらは「近いことば性」に特徴的とされる累加的な「付け足し」故に、文が長くなったことがわかる。基礎文を構成する単語が多い文を、一概に「近いことば性」が低いと判定することには、問題性があると言えよう。文を構成する要素をきちんと見極める必要がある。

4.3. 外来語使用という要素

本論文で扱った分析対象のテキストには、フランス語の使用も多くみられた。例えば、grande parure 「正装」、Touffe 「房」、fourreau à l'Angoise 「イギリス風のシース」、などがそれである。Ágel/Hennig (2006) のモデルでは、外来語もしくは借用語の使用と「近いことば性」、「遠いことば性」との関係性は述べられていない。Eisenberg (2011) は、ラテン語の使用を「遠いことば」に、若者語に見られるような英語の使用を「近いことば」に属させている。Eisenberg (2011) によ

れば、フランス語は「18 世紀にドイツ語圏において最も広く普及し、ドイツ語に最も強力に影響を与えた」(Eisenberg 2011: 362)。しかし、フランス語が広く普及したといっても、当時の上層階級に限られることである。「社会的に指導的な位置にある階層はフランス語を話し、彼らのドイツ語は多くの場合大したことはなかった」(同上、同ページ)という。このことから Eisenberg は当時のフランス語使用が「閉鎖的な社会」において使用されたものであることを示唆している。その意味において、本論文におけるフランス語の使用を、「遠いことば的な文相当表現 (Distanz-Nicht-Satz)」と類似させて、「遠いことば的な外来語 (Distanz-Fremdwort)」のようなカテゴリーを設定して、テキストの近いことば性の算出に関与させることがよいかもしれない。ただし、このことは語彙に関わることであるので、さらに慎重な方法論的考察が必要である。

5. 結

以上、多くの読者がいた『豪奢とモードのジャーナル』における女性の帽子を描写したテキスト (1786 年) の「近いことば性」(話しことば性) を、Ágel/Hennig (2006) のモデルに依拠して測定した。その結果として、テキスト B (1786 年 2 月号)、C (1786 年 6 月号)、A (1786 年 1 月号) の順に「近いことば性」が高いテキストであるということが判明した。しかし算出された値をもう一度吟味してみると、単に最終的な「近いことば性」の値だけでなく、ミクロレベル・マクロレベルでの値も同時に考察の対象に含めることで、各テキストの「近いことば性」の値をより厳密に見極めることができることがわかった。またさらに、マクロレベルにおいては、基礎文を構成する単語数が多いからといって、単に「近いことば性」が低いということには結び付かないことも明らかになった。「近いことば性」測定モデルに関して今後さらに方法論的考察を深めていくことによって、個々のテキストの特徴に合った、より精度の高い「近いことば性」の値に行き着くことができるであろう。

原典資料

テキスト(A) Journal der Moden (1786): Weibliche Kleidung.

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085474

テキスト(B) Journal der Moden (1786): Weibliche Kleidung.

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00085465

テキスト(C) Journal der Moden (1786): Weibliche Kleidung.

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00092497

参考文献

Ägel, Vilmos/Hennig, Mathilde (Hg.) (2006): *Grammatik aus Nähe und Distanz: Theorie und Praxis am Beispiel von Nähertexten 1650-2000*. Tübingen.

赤木登代 (2008) 「ドイツ女性誌の系譜－啓蒙と娯楽の機能をめぐって－」 [大阪教育大学、『大阪教育大学紀要. I, 人文科学』第 56 巻第 2 号 S. 1-18] .

Eisenberg, Peter (2011) : *Das Fremdwort im Deutschen*. Berlin.

エンゲルジング, ロルフ (1985) (中川勇治訳) 『文盲と読書の社会史』思索社.

Krempel, Lore (1935): *Die deutsche Modezeitschrift. Ihre Geschichte und Entwicklung nebst einer Bibliographie der deutschen, englischen und französischen Modezeitschriften*. Coburg.

Kröll, Christina (1979): *Journal des Luxus und der Moden. Kolorierte Kupfer aus Deutschlands erster Modezeitschrift*. Dortmund.

Kuhles, Doris (2000): Das „Journal des Luxus und der Moden“ (1786-1827). Zur Entstehung seines inhaltlichen Profils und seiner journalistischen Struktur. In: Kaiser, Gerhard/Seifer, Siegfried (Hg.) (2000): *Friedrich Justin Bertuch (1747-1822). Vergleich, Schriftsteller und Unternehmer im klassischen*. Weimar, S. 489-500.

オング, ウォルター・J.(1991) (桜井直文, 林正寛, 糟谷啓介訳) 『声の文化と文字の文化』藤原書店.

Polenz, Peter von (1999): *Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart*. Band 2. 17. und 18. Jahrhundert. Berlin.

芹澤円 (2013) 「ドイツにおけるモード誌の文体的特徴をめぐって—1786 年と 1814 年の服装記事を例として」 [学習院大学ドイツ文学会『学習院大学ドイツ文

学会研究論集』第 17 号 S.57-74.]

芹澤円 (2014) 「ドイツ最古の週刊新聞の書きことば性をめぐって—出来事をどのように報道するか—」 [金水敏・高田博行・椎名美智 (編) 『歴史語用論の世界—文法化・待遇表現・発話行為—』 ひつじ書房 S.219-245.] .

高田博行・椎名美智・小野寺典子 (編著) (2011) 『歴史語用論入門 過去のコミュニケーションを復元する』 大修館書店.

【資料】

分析対象: テクスト、1786 年（創刊年）1 月号

- 1 2. Hütthe, trägt man jezt außerordentlich groß, und zu jedem An-
zuge, nur nicht zur *grande parure*; häufig Stroh-Hütthe mit ho-
hem Kopfe, mit farbigem Bande eingefasst; um den Kopf ein
oder zwey dergleichen breite Bänder, oder eine dicke Binde von
5 Farben-Flor, die mit einem Perlen-Knopfen gefaßt, und hinten in
eine große Schleife gebunden wird, davon die Enden zwey bis
drey Finger breit über den Rand des Huthes herabhängen. Auf
der linken Seite eine *Touffe* von vier kurzen weißen Federn, aus
welcher eine große ferbige Schwung-Feder heraussteigt, die
10 *Follette* oder *la Dominante* heißt, (Tab. 1. No. 1.) Meist ist die
Garnitur des Huthes von der Farbe des Kleides; außer wenn
zwey Mode-Farben, wie in T. 1. No. 1. violet und dunkelgrün
(*gros verd*) zusammentreffen. Auf Hüthen die mit Atlas, Taft
oder Flor überzogen sind, trägt man Band, Flor und Blumen,
15 sowohl Guirlanden als einzelne Zweige. Der Huth mit der gro-
ßen Schleife auf T. 2. heißt *à la Cheruhin*. Zum *Deshabille* tra-
gen die Damen gewöhnlich runde englische Castor-Hütthe, oder
Jackey en Ourson, schwarz oder grau, mit hohen und oben plat-
ten Kopfe, (*à forme carree*) die Krämpe 5 bis 6 Zoll breit; ent-
20 weder Kopf und Krämpen ganz rauch, oder nur mit einem rau-
chen Rande. Um jenen wird meistens ein schwarzes Band mit
einer brillantirten Stahlschnalle, die an der Seite auf einer großen
Band-Rose liegt; um letzteren aber bunte Mode-Bänder mit
Schleifen, getragen. (1786: Januar. 17, 18)

帽子は目下、非常に大きなものが被られており、いずれの服装に対しても被られますが、正装に対してだけは被られません；しばしば頭部が高く、色のついたリボンで囲まれた麦わら帽子が被られています；頭部の周りは、一本か二本の色のついた幅広なリボン、もしくはパールのボタンで留められた幅広で色のついたベールがつけられていて、それが帽子の後ろで結ばれて大きなリボンになっています。そこからリボンの端が、2-3本の指幅で、帽子の淵を越えて垂れ下がっています。左側には4本の短くて白い羽飾りからなる房があり、そこから *Follette* もしくは *la Dominante* と呼ばれる大きくて色のついた弓形の曲線の羽飾りが外側に出ています（挿し絵 1-1）。たいてい、帽子の飾りというのは、洋服の色と同じにします；ただし、挿し絵 1-1 にあるバイオレット色と深緑色の二色の流行色が使用されている場合は関係ありません。サテンかタフタもしくはベールで覆われている帽子の上には、リボン、ベール、枝のついた花飾りの形で花がつけられています。T2 にある大きなリボンの付いた帽子は *a la Cheruhin* と呼ばれます。女性は帽子を脱ぐときのために、通常円形のイギリスのビーバーハットを被ります。それは *Jackey en Ourson* とも言う帽子であって、それは黒色もしくは灰色で、高くかつ上部は平らな頭部であり、その縁は5から6インチの幅です。頭部と縁が全て毛皮であるか、もしくは、縁だけが毛皮であるかのどちらかです。前者のタイプはたいてい、ブリリアントカットされた金属の留め金がついた黒いリボンが帽子の周囲に飾られています。その留め金はリボンでできた大きなバラの脇についています。一方後者のタイプは、蝶結びがついた色とりどりの流行のリボンが帽子の周りにつけられています。

分析対象: テクスト、1786 年（創刊年）2 月号

- 1 Die erste (so wie auch die andere) hat eine *accomodage à deux boucles*,
und den Chignon unterwärts aufgeschlagen. Sie trägt eine Haube a la
Laitiere mit einem dunkelgrünen Bande; Ohren-Ringe en plaquettes;
ein einfaches Halstuch von Italienischen Flor; ein *fourreau à*
5 *l'Angloise* mit Kragen, hell violett, mit weißen Bande, a la Feanette,
eingefaßt, und vorn mit einer dunkelgrünen Bandschleife gebunden.
- Die zweyte trägt eine Haube *à la Figaro*, von Ital. Flor, mit einer
weißen und violetten Schwungfeder; mitten über die Haube läuft ein
schwarzes Sammt-Band oder *barrière* mit weißen Perlen besetzt,
10 und an der linken Seite hängen zwey Perlen-Schnuren frey
schwebend herab. In den Ohren hat sie große *anneaux unis*, und
um den Hals ein sehr reiches Halstuch *à gorge angloise*. Dieß
besteht eigentlich aus zwey besondern Stücken, nemlich *gorge*
angloise und dem Halstuche mit doppelten Kragen. Die *gorge*
15 *angloise*, welche von Italienischen Flor, vorn ganz zu ist, und oben
um den Hals mit einem kleinen *Henri IV.* anschließt, wird zuerst
umgethan, und im Nacken mit dem sehr langen rosenfarbnen
Bande zugebunden. Dann folgt das Halstuch, dessen oberer
schmaler Kragen von weißen Atias, der untere aber von *gaze*
20 *soufflce*, und einer wie der andere mit belegtem Flor garnirt ist.
Das Halstuch, welches vorn offen, wird unter der *gorge angloise*
zusammengesteckt, diese etwas voll darüber herausgezogen und
gepufft, und dann das lange rosa Band von hinten hervor leicht
darum geschlungen und vor der Brust in eine Schleife gebunden.
- 25 Das *fourreau* so sie trägt ist von Atlas *couleur de bronze*. (1786:
Februar. 61, 62)

最初の女性は（もう 1 人とも同様に）2 つのブークレ織の *accomodage* を身につけており、シニョンは下の方で巻きあげられています。彼女は暗緑色のリボンがついた、縁なし帽 *a la Laitiere* をかぶっています；イヤリング *en plaquettes*；イタリアのベールでできた簡素なスカーフ；襟のついたイギリス風のシース、明るい紫色、白いリボン付き、*a la Feanette*、縁取り、そして前方では暗緑色のリボンの蝶結びで結ばれています。

2 人目の女性は、イタリア産のベール製で、白と紫色の羽飾りが付いた縁なし帽 *a la Figaro* をかぶっており；帽子の真ん中表面に沿って、黒色の *Sammt* リボンか、もしくは白いパールが縫い付けられているひもが通っています、そして（帽子の）左側にはパールでできた二本の飾りひもが自由に揺れながら垂れ下がっています。その女性は耳には大きな（イヤ）リングを身につけ、そして首回りにはたいへん豪華なスカーフ *gorge angloise* をつけています。これはそもそも二つの別個の部分（スカーフ）から成っており、すなわち、*gorge angloise* と二重の襟のついたスカーフで構成されています。イタリアのベールでできており、前で完全に閉じ、そして首回りの上の方では小さな *Henri IV* という襟とつながっている *gorge angloise* は、まず最初に巻き付けられ、そして首のところで非常に長いバラ色のリボンで結ばれています。それから白いサテンでできた、その上方の細い襟のスカーフが続いています。そしてその襟は下方ではしかしふんわりした紗できており、そしてもう一方と同様に覆われたサテンによって飾られています。前で覆われていないスカーフは、*gorge angloise* の下で留められており、*gorge angloise* はいくらかふくくらとそこから引き出され、ふくらみをつけられ、そしてさらにこの長いバラ色のリボンは後ろから前へその周りに軽く巻き付けられ、そして胸の前でリボンに結ばれています。彼女が身につけているシースは *couleur de bronze* というサテンでできています。

分析対象: テクスト、1786 年（創刊年）6 月号

- 1 Man ist jezt in Paris in dem Geschmacks alle Hauben ungeheuer groß zu tragen, und den Flor auf dem Kopfe oder den Capot in gewißen Formen zu puffen. So hat man Poufs de gaze *en rocher*, wo der Flor wie Felsenflippen und Gletscher in Berg und Thal geformt ist; oder
- 5 *à pointes de Diamans*, wo er in lauter Facetten und Rauten erscheint u. s w. Diese neue Erfindung ist von der berühmten Putzmacherin *Dlle. Roussand*, Mde. de Modes, rue du Theatre françois. Die weiten und langen Flor-Schleyer welche hinten bis zur Taille hinab hangen, sind bey nahe so groß, daß sich eine Dame so gut als in einen
- 10 Mantel hineinwickeln könnte. Vorzüglich groß sind sie an den Baigneusen, die man jezt gewöhnlich zu Pierrots oder en *Négligé* trägt. Wir liefern eine dergleichen *Baigneuse* auf Taf. *XVII. fig. 2*. Sie ist von klaren Flor, mit großen Schleyer der hinten bis zum Gürtel herabhängt. Vorn über der Stirn steht eine große gesperrte
- 15 Schleife von Citron-Bande mit schwarzen Saume; davon die beyden Enden auf die Schultern herabfallen. Sie kleiden gewißen Gesichtern und Figuren sehr gut. — Indeßen ist doch der Geschmack an den großen Hauben in Paris nicht allgemein, und man trägt auch welche von mittler Größe die sehr schön sind. Eine von der schönsten und simpelsten
- 20 Form ist eine *Toque à la Turque*, die wir auf Taf. *XVIII.* hier liefern. Sie ist von weißen gestreiften Flor-Linon, hat vorn rund herum kleine Perlen-Gehänge, und an der lincken Seite ein Paar Doppel-Festons von größern Perlen; die Flügel hangen kaum bis zu den Schultern herab, und drauf sind ein Paar grüne Perlen-Zweige und ein
- 25 Zweig kleine Blume gesteckt. Unsere Leserinnen werden aus der Figur Taf. *XVIII.* sehen, daß sie sehr gut kleidet. (1786: Juni. 214, 215)

現在パリではその流行において全ての帽子がとてつもなく大きく被られています。そして頭の上に紗がつけられているか、もしくは帽子にある形状でふくらみがつけられています。例えば *Poufs de gaze en rocher* がついています。なぜならその紗は岩山（の留め具）や、山や溪谷にある氷河のように形成されているためです。もしくは *a pointes de Diamans* がついています。なぜならそれはまじりけのない研磨面や菱形模様で現れているからです。このような形状等があげられます。この新しい着想は有名な装飾品職人 *Dlle. Roussand, Mde. de Modes, rue du Theatre francois* によるものです。広くて長く、後ろで、ウエスト部分まで下へ垂れているベールは、おおよそ、女性がほとんどコートの中へ身を包むことができるのと同じくらい大きいです。とりわけ大きいそのベールは水浴びをする人につけられ、それらは現在は習慣的にピエロもしくはネグリジェに対してつけられます。われわれは同様の *Baigneuse* というベールを挿絵 XVII. の人物 2 にて展開しています。そのベールは透明な紗でできていて、後ろでは帯まで垂れ下がっている大きなベールがついています。前方では額の上方に、黒い縁取りのあるレモン色のリボンでできた大きく広げられたリボンがあります。そこからリボンの両端が肩の上に垂れ落ちています。それらは特定の外見や姿にととてもよく似合います。しかしながらそれでもパリにおける大きな縁なし帽子への流行は一般的ではなく、とても美しく、中くらいのおおきさの帽子も身につけられています。最も美しくかつ最もシンプルな形状のひとつは、我々がこの挿絵 XVIII. にて提供している *Toque a la Turque* です。*Toque a la Turque* は、白い縞模様の紗リボンでできており、前方では周囲に小さな真珠の下げ飾りがあり、左側には大きな真珠でできた一對の二重花綵があります。羽はかろうじて肩まで達する程度にたれ下がっており、その上には一組の真珠枝とさらに枝が小さな花へ差し込まれています。われわれの読者は挿絵 XVIII. から、*Toque a la Turque* がとてもよく似合っていることがわかるでしょう。

（せりざわ・まどか 学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程）

Wie kann Mündlichkeit/Schriftlichkeit gemessen werden?

—Methodische Überlegungen am Beispiel von Texten aus deutschen
Modezeitschriften des späten 18. Jahrhunderts

MADOKA SERIZAWA

1786 erschien die erste Ausgabe des „Journals des Luxus und der Moden“, der zweiten Modezeitschrift Deutschlands. Man schätzt, dass die Zeitschrift mindestens 25000 Leser hatte (vgl. Kuhles 2000), weshalb sie, gemessen an den Leserzahlen anderer Zeitschriften der Zeit, als Bestseller angesehen werden kann.

In dieser Arbeit möchte ich drei Texte aus der frühen Zeit des „Journals des Luxus und der Moden“ (nämlich von Januar, Februar und Juni 1786), die alle weibliche Kleidung, vor allem Hüte oder Hauben, zum Thema haben, miteinander vergleichen und dabei untersuchen, ob es Unterschiede zwischen diesen Texten gibt. Dabei analysiere ich diese Texte in Hinblick auf ihre „Nähesprachlichkeit/Distanzsprachlichkeit“ (Ágel/Hennig 2006).

Für die Messung der Nähesprachlichkeit wird der Untersuchungsgegenstand in zwei Ebenen gegliedert, und zwar in eine Mikroebene und in eine Makroebene. Nach Ágel/Hennig bedeutet der Durchschnitt der beiden Ebenen den Wert der Nähesprachlichkeit des Textes. Mit Hilfe dieses Modells werden in diesem Aufsatz die drei genannten Texte analysiert, wobei der erste Text vom Januar 8.66%, der zweite vom Februar 12.36% und der dritte vom Juni 14.33% Nähesprachlichkeit ergaben.

Bei der Messung stieß ich auf eine Reihe von Schwierigkeiten, die zu einigen Korrekturen Anlass gaben. Hinsichtlich der Durchschnittsberechnung scheint es auf den ersten Blick zwar so, dass es nur einen Wert für den Text gibt, doch da in zwei Textebenen unterschieden wurde, sollten sich auch zwei Werte ergeben. Deshalb schlage ich zur Veranschaulichung ein Koordinatensystem mit einer prozentualen Koordinatenachse, d. h. einer Längsachse für die Mikroebene (in die obere Richtung) und Makroebene (in die untere Richtung) und einer Abszissenachse als Nähesprachlichkeit vor. Wenn man auf

dieser Koordinatenachse die drei Punkte (jeder sich ergebene Werte der Mikroebene, Makroebene und der letzten Nähesprachlichkeit) verbindet, dann erhält man ein Dreieck. Mit der Koordinatenachse und dem Dreieck werden alle drei Werte zugleich anschaulich gemacht.

Die zweite Korrektur betrifft die Länge eines Satzes. Nach Ágel/Hennig gehört die Länge des Satzes zu einem derjenigen Elemente, das den Wert der Nähesprachlichkeit bestimmt, d. h. je länger ein Satz ist, desto geringer ist die Nähesprachlichkeit. Aber das ist nicht so einfach zu entscheiden. In meinen Textkorpus gibt es z. B. einen Satz, der aus 66 Wörtern besteht, der aber im Nachfeld Präpositionalphrasen, Partizipial- bzw. verblose Konstruktionen aufweist. Laut Ong (1991) ist ein derart charakterisierter Satz eher im mündlichen Sprachgebrauch zu finden.

Drittens ist die Rolle der Gallizismen in Betracht zu ziehen. In den untersuchten Texten gibt es viele französische Begriffe, aber das Modell von Ágel/Hennig berücksichtigt keine Fremdwörter. Bekanntlich benutzten im 18. Jahrhundert die höheren Schichten Französisch (vgl. Eisenberg 2011). Deshalb sollte man auch die Verwendung von Fremdwörtern bei der Untersuchung berücksichtigen.

Mit der Anwendung des Modells von Ágel/Hennig kann der Wert der Nähesprachlichkeit in unterschiedlichen Texten ermittelt werden. Doch für eine genauere Analyse der Nähesprachlichkeit müssen an diesem Modell noch einige Konkretisierungen und Korrekturen vorgenommen werden.

